

聖書:列王記第二 4章18~28節

説教:神の人のところへ行くその2

はじめに

今日のところに入る前に、いつものようにまず前回のあらすじを簡単に振り返っておきたいと思えます。

エリシャは、預言者として北イスラエルの中心都市であるサマリアを拠点としながら地方の町や村を定期的に巡り、そこで神のことばを語りながら、人々の霊的な指導をしておりました。あるときシュネムという町に立ち寄ると、その町に住むひとりの女性がエリシャに声かけて食事に招きます。エリシャを見たときに、ほかの人とは違う特別な印象を抱いたようなのです。それから、たびたび家に招いて話しをするうちに、「神の聖なる方に違いない」と確信し、わざわざエリシャのために、いつでも自由に泊まって使えるように、部屋を作って上げることにしました。エリシャはこれを見て、お礼をしたいと思い、女性に「なにかしてもらいたいことはないか」と尋ねると、「私は満足して暮らしていますから」と言って、エリシャの申し出をやんわりと辞退いたします。そこで話しが終われば何事もなかったのですが、エリシャが「来年の今ごろ、あなたは男の子を抱くようになる」と語ったことから、シュネムの女性の人生は思いもかけなかった方向に展開していくことになります。それまで、この夫婦は子どもが与えられるよう、ずっと神に祈ってきました。けれども何年経っても祈りはかなえられず、とうとう夫は年老いてしまい、すっかり子どものことは諦めていたのです。そこへ突然エリシャから、子どもが生まれると聞かされました。だれだってそうでしょうが、これは冗談に違いないと思ってまったく取り合おうとしません。ところがそれから一年経ってみると、エリシャが語ったとおりに男の子を産むこととなります。あきらめていた子どもが思いがけず与えられたのですから、どんなにか嬉しかっただろうと想像します。もちろん神の恵みにまっさきに感謝したでしょうし、またエリシャにも感謝しただろうと思うのです。

これが前回までのあらすじになります。

## 1 母親

### 1) 子どもの突然の死

さて、その子どもはどの後どうなったのでしょうか。18節から20節を読みます。

「その子が大きくなって、ある日、刈り入れをする者たちと一緒にいる、父のところに出て行ったとき、父親に、「頭が、頭が」と言った。父親は若者に、「この子を母親のところを抱いて行ってくれ」と命じた。若者はその子を抱き、母親のところに連れて行った。この子は昼まで母親の膝の上に休んでいたが、ついに死んでしまった。」

この日、子どもは畑で刈り入れをしていた父親と一緒に来て、皆が働いているそばで元気に遊んでいたようです。ところが突然、「頭が、頭が」と言いながらうずくまり、そこで意識を失ってしまいます。ただならぬ様子に気がついた父親は、すぐに母親のところに連れて行くようにと若者に命じます。母親は、子どもを膝の上に抱きながら様子を見守っていましたが、それから間もなく子どもは亡くなってしまいます。おそらく、なにかの深刻な病気が原因だったのだろうと想像されます。

このようなとき親はどうするでしょうか。だれでもそうですが、まず自分を責めるでしょう。「自分ももっと普段から注意を払って子どもの様子を観察していたら、重い病気になる前に異常に気がつき治療ができたのではないか。そうしたら死なずに済んだのではないか。」あるいはこう言って責めるかも知れません。「たとえ助からなかったとしても、苦しんでいる子どものために、最期まで親として最善のことはして上げたかった。」一生懸命手を尽くしたけれど、それでもだめだったというのなら、まだ諦めもついたらかもしれません。でも、どうでしょうか。読んでおわかりのとおり、この母親は何もすることもできませんでした。ただ苦しんでいる子どもをただ膝の上で抱きながら死んでいくのを見ていくしかなかったのですから、こんなつらいことはありません。

### 2) 神の人の寝台に寝かせる

この母親はこの後どうしたのでしょうか。21節。

「彼女は屋上に上がって、神の人の寝台にその子を寝かせ、戸を閉めて出て行った。」

屋上のエリシャの部屋にある寝台の上に、亡くなった子どもを寝かせたというのです。どうしてこのようなことをしたのか。そのことはまた後で考えることにして、その前に夫とのやりとりに目を留めておきます。

この女性は夫に、「これから急いで神の人のところへ行くのでよろしく願います」と告げると、これを聞いた夫は、妻の意外な行動にかなり驚いたようです。「どうして、今日あの人のところへ行くのか」と質問します。すると妻は、ただひとこと「かまいません」と答えています。

## 2 シャローム

### 1) 「かまいません」

この「かまいません」と訳されていることばですが、もともとは「シャローム」ということばが使われています。「シャローム」ということばは、皆さんもどこかで聞いたことがあると思います。今日はこのことばに注目してまいります。なぜかと言いますと二つ理由があります。

まず一つ目の理由です。「シャローム」は、普通「平和」とか「平安」、あるいは「元気です」、「無事です」、「穏やかです」という意味で使うことばです。ところが、これは私が調べた限りですが、「シャローム」を「かまいません」と訳しているところは、聖書のなかでここしかないのです。妻が、夫の問いかけに対して、ただひとこと「シャローム」と答えるのは、不思議と言えば不思議です。翻訳を担当した先生もどう訳したらよいのか、相当困ったのではないかと思うくらいです。でも、ただそれだけなら、別にそんなものなのだろうで終わりですが、そうはならないもう一つの理由があります。

### 2) 「無事です」

それが26節にあります。

「さあ、走って行って彼女を迎え、言いなさい。『あなたは無事ですか。あなたのご主人は無事ですか。お子さんは無事ですか』と。」彼女はそれこう答えた。『無事です。』」

エリシャのもとで働いていたゲハジは、読んでおわかりのとおり、三度「無事ですか」と繰り返しています。それに対して母親は「無事です」と答えています。皆さんこれを読んでおかしいと思ったのではないですか。ゲハジは「お子さんは無事ですか」と尋ねています。そうしたら当然、母親はこんなふうに答えるべきではないですか。「実は、子どもは死にました。」ところが、実際は「無事です」と答えたというのです。これはおかしいですよ。なぜだろうと考えてしまいます。ある人は、「ゲハジに詳しいことを説明するのが面倒だったので、こんなふうに答えたのだろう」と解説していますが、そういうことではないと思います。では、母

親は気が動転していて、思わず事実とは違うことを、つい語ったということでしょうか。これも違うと思います。聖書にはすべて私たちの救いに関係していることしか書いていません。救いに関係ないことは書いていないと思って間違いなくくらいです。そうすると、わざわざ「無事です」と答えたと書いてあるなら、そこに何か重大な意味があると考えなくてはなりません。

さきほども、神の人のところへ行く季節でもないのに、どうして今行くのかと問いかけた夫に対して、「シャローム」とひとことだけ答えたのは不思議だと言いましたが、26節でもゲハジに対して「シャローム」とひとことだけ答えています。これはもはや単なる偶然ではありません。この母親は、なにか特別な思いがあって、わざわざ「シャローム」と言っているのではないのでしょうか。では、それはいったいなんであったのか。もう少し深掘りしてまいります。

## 3 神に訴える

### 1) エリヤを思い起こす(列王記第一17章)

もういちど母親の行動を整理してみましょう。子どもが亡くなったとき、母親はエリシャの部屋に置かれていた寝台の上に子どもを寝かせ、戸を閉めて出て行きました。なぜそうしたのかは説明がありませんが、推測することができます。

話しは、エリシャの先生であったエリヤが活躍していた頃に戻ります。列王記第一17章には、大飢饉のために食べるものがなくなったやもめのことが出てきます。エリヤはこのやもめと一人息子を救うために、その家にあった「かめ」の粉と壺に入っていた油を満たすという奇跡を起こして救いました。それだけでもすごいことですが、この話しには続きがあります。あるとき、この家の息子が重い病気にかかって死んでしまうということが起きます。これを見たエリヤは、母親の懐に抱かれていた子どもを受け取って、自分が寝ていた寝床に寝かせ、主に祈ったところ、子どもが生き返った。そういう話しが列王記第一17章に書かれています。

ここまで聞いていて、みなさん「あれ？」と思ったのではないですか。このエリヤの話しは、今私たちが読んでいるエリシャの話とよく似ているのです。今日は一人息子がなくなった話のところを見ていますが、4章の最初の所には、夫を亡くした貧しいやもめが、エリシャのところに訴えてきた話しが書かれていました。エリシャはやもめの訴えを聞くと、「あなたの家には何がありますか」と尋ねます。やもめが、「油の壺が一つしかありませ

ん」と答えたので、あなたの家にある壺から油を注ぎなさいと言います。そうしたら、近所の壺全部をかき集めても余るほどの油が出てきて、この家族は救われていった。そういう話が書かれていました。どうですか。エリヤの時に起きた出来事とよく似ていませんか。

シュネムの女性は、エリヤを食事に招いたときに、エリヤからいろいろなことを聞いていたと思うのです。自分の先生であったエリヤがどんな預言者で、どんなことをしたのか、そういう話のなかで、貧しいやもめの一人息子が死んでしまったとき、エリヤはどうやってその子どもをよみがえらせたのか。そのことも聞いていたでしょう。でもそのときは、「すごいことがあるものだ。でも本当だろうか。」そんなふうにごく疑う気持ちがあった、自分とは関係のない遠い世界の話しにしか聞こえませんでした。

ところが、いざ自分の子どもが亡くなり、突然の試練に突き落とされたとき、真っ先に思い出したのはエリヤのことだったのではないのでしょうか。エリヤが死んだ子どもをよみがえらせた。それを聞いたときは信じられなかったけれど、でも今自分が最後に頼れるのはそのことしかない気がつきます。もしあの話しが本当だったというのなら、諦めるのは早い。そこにかけてみよう。そう思いました。

とは言っても、いったい何をしたらよいのでしょうか。もしここにエリヤがいたのなら、もちろんすぐにエリヤにお願いしたいのです。でもあいにく今はろばに乗って半日かかるカルメル山のところにいます。スマホがあるわけではないので、すぐに連絡がつかせません。エリヤを呼びに行くまでの間に、今すぐすべきことはなんだろうか。あのとき、エリヤが何をしたのか、落ち着いて思い出してみました。そうだ、確かエリヤは亡くなった子どもを抱いて自分の寝床に寝せたと書いていた。とにかくエリヤを真似して、同じことをしてみよう。

こうして見てくると、子どもが亡くなったとき、屋上にあるエリヤの部屋に上って行って、寝台に寝かせたのは、このような母親の信仰から出たものだったことがわかるのです。

## 2) どこに救いがあるのか

さて、ここから「シャローム」の問題にとりかかっていきます。なぜ母親は夫の問いかけに対して、「シャローム」と答えたのでしょうか。ゲハジが「お子さんは無事ですか」と問いかけたのに対

して、なぜ「シャローム」と答えたのでしょうか。そういう問題でした。

この母親は、シュネムの町でエリヤを初めて見かけたとき、「この人はきっと何か特別な人に違いない」と感じるほど霊的に敏感な人であり、「あの方は、きっと神の聖なる方に違いありません」と言って、自分の信仰を告白する人でもありました。

そのような信仰者が、子どもを失うという試練の中に立たされたていきます。こんなとき人は試されます。いったい自分は何を頼りにしていたのか。本当の自分があらわにされていきます。この女性は信仰がありながらも、気がつかないうちに、目に見えるものに頼ろうとしていたのかもしれない。私には夫がいる。使用人もいるし、たくさんの財産もある。そして念願の子どもも神さまから与えられた。自分はなんと幸せ者なのだろう。そんなふう満足していたのではないのでしょうか。

それがいま突然に子どもを失いました。もちろん最初は、この悲しみの中から自分を救ってくれるものがないか、必死になって探したでしょう。でも、助けになるようなものがこの世には何一つないことに気がつきます。「目の前が真っ暗になる」という言い方がありますが、まさにそういうところまで追い込まれました。それでもどこかに光はないかと探しました。そんなとき、エリヤのことは思い出しました。これが本当の救いの光なのか、確信はありません。死んだ子どもがよみがえる、あのときは信じられない思いで聞いていました。でもいま、子どもを救うためには、それを信じるしかありません。もしここで、死んだ者がよみがえるなどありえない、とってしまったらどうなるでしょう。子どもを救うことは絶対にできないのです。

これでおわかりでしょうか。この母親が夫の問いかけに対して「シャローム」「大丈夫です」と答えたのはなぜだったのか。ゲハジが「お子さんは無事ですか」と問いかけたとき、「シャローム」「元気です」と答えたのはなぜだったのか。必ず生き返る。必ず子どもを取り戻すことができる。まるで自分に言い聞かせるように、それを信じようとしていた。子どもが救われることを願う母親の信仰から出たことばだったのです。

## 3) 神に訴える根拠

このような母親の姿を見て、ある人はこんなことを言うかもしれません。「母親の気持ちはわからないわけではないけれど、死んだ人が生き返る

なんてあり得ない話しでしょう。あまりにも悲しい現実を受け入れたくないの、ありえないようなことを妄想しているだけではないのか。」

妄想というのは、なんの根拠もなく「こうなるに決まっている」と思い込むことを言います。でももし、何かの確かな根拠があるなら、それはもはや妄想とは言いません。ではこの母親の場合はどうでしょうか。何か根拠があるのでしょうか。

(問) あります。28節で母親がエリシャにどんなことを訴えたのか。そこを見てみましょう。

「私をご主人様に子どもを求めたでしょうか。この私にそんな気休めを言わないでくださいと申し上げたではありませんか。」

繰り返しになりますが、母親のほうからは一度も、子どもを与えてくださいと願ったことはありませんでした。エリシャが「来年の今ごろ、あなたは男の子を抱くようになる」と言われたときも、まさかそんなことがあるはずはない、冗談も休み休み言ってくださいと言って、真面目に受け取るうさえしなかつたほどです。

この母親はそのことを訴えています。もしエリシャが気休めで言ったのではなかったのなら、なぜ子どもはいま死ななければならないのか。なぜ子どもを与えておきながら、後になって取り上げようとするのか。それはおかしい。理屈に合わない話しではないか。神のことばが気休めではないというのなら、絶対に子どもは取り上げられるはずはない。神のことばがまことであり、真理であるというのなら、死んだ子どもはよみがえらなければならないはずではないのか。それとも、神のことばは気まぐれのようにして取り消されたり、変更されたりすることがあるのか。もしそうなら、それこそ「気休め」ということでしょうか。しかし私ははっきりと言いました。「気休めは言わないでください、と。」その約束をあなたは忘れたのですか。

これが母親の訴えです。子どもを失った母親の怒りが込められています。けれどもこれは正しい怒りと言ってもいいでしょう。決して妄想ではありません。なぜなら、エリシャを通して語られた神のことばを根拠にして訴えているからです。

#### 4) 神の真実を知っていく

なぜ人は思いがけなく試練を通されていくのでしょうか。それはだれにも説明できません。ただ、ギリギリの試練を通されたときに初めてわかることがある、そういうことは言えるだろうと思います。あるいはこうも言えるかもしれません。人

が試練のなかでもがき苦しんで叫ぶとき、私たちは知らず知らずのうちに、神の真実のことばを語るように導かれていくのではないか。まさにこの母親がそうなのです。

神が真実であるならば、死んだ者がそのままにされることは絶対にあってはならない。必ずよみがえらなければならない。そのように母親は訴えました。この母親のことばは、やがてイエス・キリストを通して実現していったことを私たちは知っています。イエス・キリストもまた、十字架の苦しみを背負いながら、私たちに神の真実のことばを語ってくださっていたことを思い起こします。

真実の神は、死んだ者を必ずよみがえらせてくださる。そこにこそ私たちの本当の光があることを信じて、また歩んでいきたいと願います。